

私の読んだ本

「僕アホやない人間だ」

「しつけ」



山本秀子

生まれてくる子どもが、現在の世の中では不都合な遺伝子をもっているかもしれない。親も子もそれで一生、苦労するかもしれない。そんな状況に出会った私は、果たして産んでよいものか悩んでいた。そして、夫にいわれた。「親には、どんな生命であれ、それを抹殺する権利はないはずだ。自分もその遺伝子をもって今まで生きてきたけれど……産んでくれてよかったと思う……。」と。そんなことがあって背骨がシャンとさせられた時、水上勉の「くるま椅子のうた」に出会った。脊

髄破裂で生まれてきたわが子を、医師から見放された子を、理屈ぬきに心と身体でかき抱き、乳をふくませる母親……。そして、重い知恵遅れの施設、止揚学園長、福井達雨の「僕アホやない人間だ」である。ともかく、福祉事業関係の書物にありがちな気負いが全く無いというのが、読ませていただいた第一印象である。一生のうちのいつか、福祉施設ですごしてみたいと思っている私に、一つのパンチを食らわせ、また手をさしのべてくれた。「この仕事は悲壮感や使命感ではできない、

平凡な普通の人でなくては……。自分の一人よがりの自信を子どもによって破られた時からこの仕事ははじまるんや……。アホになって子どもと一緒になれるか」そんなところに水上勉の作品との、また普通一般にいわれる子どもと一体になる、子どもにつく教育との共通点を見た。

また「教育とか社会福祉とかは、現代的非合理性をもたなければならぬ。それなのに」できるだけしわ寄せを子どもにもつていかに職員でなくなんだ」という心がだんだん失われ、ただ職員の合理化が優先されていくようだ」という。マスコミ紙上でいろいろ取上げられる今日だが、その中でいっつか、涙の流し方、感動の仕方、批判の仕方が、子ども本来のところからずれてかたまっていきつつあったのに

気づかされ、ハッとした。同情され、涙を流されながらも人間として認められていないところからの「僕アホやない人間だ」の叫び……。(柏樹社)

世にたくさん出まわっている、いわゆる How to 式のしつけの本とは趣を異にした、文献を基にした着実な著書である。従来の日本民俗学における「しつけ」をさぐり、心理学の立場からフロイドよりむしろ発達段階における「文化」の影響を重視している。そしてアメリカ人による「日本文化とパーソナリティ」の研究から、日本人のしつけ方、しつけられ方、成長の仕方を見、同時に「日本人の土着の論理」に言及していくユニークな面がおもしろい。

子どもは一冊の本であり、おとなは

そこから何かを読みとり、人生の経験者として、何かをかきこんでいかなくてはならない。(周郷博・母と子の詩集より) それこそがしつけだと思うが、現代の子どもを考える時、何をどのようにかきこんでいったらよいのか迷う。時代を越えての真実をつかみたいと思う。そんな時、無意識のうちに日本人に脈づいているものに気づかせてくれる点がこの中にくつか見いだせる。

「まわりの人からうしろ指をさされず、十人並の平凡な生涯を送る人間となる」ことが、しつけの目標とされてきた。それを幼児の頃はみようみまねで家人から学び、さらに地域社会の成員として一人前になるためのムラを場とするしつけに移っていく。

ところが今日、都市化が進み、世間

への信頼が薄れ、育児における親の責任や分担が増大しつつある教育ママ出現の基がここにも見いだせそうだ。また、外遊び、子ども集団がなくなりつつあり、さらに兄弟数すら少なくなっている今、そこで養われてきたものはどかが肩代りしなくてはならないのだろうか。幼稚園の役割の変化がせまられていると考える。また単に狭い意味の集団適応でない、世界的視野に立った「しつけ」の意味をとらえなおし、人とのつながりをあたためなおしていきたい。

(原ひろ子・我妻洋著・弘文社)